

1

説明文は菅野仁（かんのひとし）『友だち幻想 人と人の〈つながり〉を考える』からの出題です。人と人とのつながり方は時代と共に変化しているということについて述べた文章です。

問一は、1 頁下段 45 行目『人は一人では生きていけない』というこれまでの前提」のその「前提」に関して説明する問題です。「これまでの」ということは、かつての日本の前提を問われているのであり、よって、1 頁上段 20 行目以降の部分に着目します。29 行目にある「生活に必要な物資を調達するためにも、仕事に就くにしても、いろいろな人たちの手を借りなければいけなかった」という部分をまとめます。解答例としては、「生活必需品を調達したり、仕事に就いたりするためには、いろいろな人たちの手を借りなければいけなかったという前提。」などになります。なお、解答の文末は「～前提。」とすることが求められます。

問二は、1 頁下段 53 行目「こうした観点」を説明する問題です。つまり、指示語の内容を聞いている問題になります。「こうした」という指示語ですので、傍線部より前の部分に着目します。すると、傍線部直前の 50 行目に「一人でも生きていくことができってしまう社会だから、人とつながることが昔より複雑で難しいのは当たり前だし、人とのつながりが本当の意味で大切になってきている」とありますので、この部分の要点をまとめます。解答例としては「一人でも生きていくことが可能な社会だからこそ、人とのつながりは複雑で難しいがより大切であるという観点。」などとなります。解答に使用する箇所は比較の見つけやすいですが、文末を「～観点。」にすることには注意が必要です。

問三は、2 頁上段 73 行目「かえって傷ついたり、人を追い詰めたりする」という箇所に関する設問です。傍線部直前に「現代は、それを求めることによって、」とあり、この部分の「それ」とは、更にこの直前の部分から「つながり」とわかります。つまり、現代において、人とのつながりをもとめることによってかえって不利益が生じてしまう、その原因を答える必要があります。75 行目に「どうしてそうなるのでしょうか。」とありますので、これ以降の部分を読み進めると、直後の 76 行目に『ムラ社会』の時代の伝統的な考えを引きずっているから」とあります。また、95 行目に「さまざまに多様で異質な生活形態や価値観をもった人びとが隣り合って暮らしているいまの時代」という、「現代」に関して説明している箇所があり、これらの部分をまとめます。解答例としては「多様で異質な生活形態や価値観を持った人々が隣り合って暮らしている現代において、『ムラ社会』の時代の伝統的な考え方に基づく親しさの作法は通用しなくなっているから。」などが考えられます。文末は「～から。」「～ので。」「～ため。」など、理由を答える際の文末表現であれば正解となります。

問四は、2 頁上段 97 行目、空欄 4 に入る二字の熟語を選ぶ問題です。ここは過去の時代における共同体の作法を説明している部分であり、91 行目に「みんな同じような職業や生活形態を前提とする」とあることから、アの「同質」が正解となります。

問五は、脱けている文を本文中の適切な位置に戻す問題です。脱けている文の中の「そのこと」が何を指しているかを考えれば、本文全体の内容より、「人とのつながりを持つこと」という内容であることは見当がつかます。61 行目の「誰かとつながりを保ちたい。」がその旨にあたるので、直後に戻すことができます。正解は「だからほと」の五字となります。

問六は、空欄[A]から[D]に適切なことばを入れる問題です。[A]は 15 行目にある「しかし」という逆接の接続詞との関係性からエの「もちろん」、[B]は直前まで、一人では生活できない過去の生活状況について述べ、直後では、一人でも生きていける現代の生活状況について述べていますので、逆接の意味であるウの「ところが」が入ります。[C]は直前までの現代の生活状況を直後でより具体的な、より顕著な例を説明していますので、アの「とりわけ」、[D]は直後でここまでの内容を理由とした上での筆者の主張が述べられていますので、イの「だから」がそれぞれ入ります。

問七は、漢字の書き取りです。楷書で丁寧に書く必要があります。

問八は、本文の内容に合致しているものを選ぶ問題です。1 頁下段 34～44 行目の内容と合致するイが正解です。他の選択肢を見ますと、アは「暮らしている場所が都会であれば都会であるほど」の部分が、1 頁上段 10 行目の内容に反します。ウは「若い人よりも年配の方が」の部分が、2 頁上段 79 行目の内容に反します。エに関しては前半の「都市開発」に関する記述は本文にはありませんし、後半の「昔ながらの人と人とのつながりのあり方に立ち返るべき」という主張も本文にはありません。

2

物語文は村田沙耶香『マウス』からの出題です。

問一は、4 頁上段 16 行目の「私たち」を別の言葉で具体的に言い換える問題です。4 頁下段 57 行目の「私、麗ちゃん、久美ちゃんの三人組」を抜き出します。

問二は、4 頁上段 20 行目に入るのもっともふさわしい台詞を選ぶ問題です。直後の律の台詞より、瀬里奈は早野さんと話すことに対して肯定的な返事をしたことがうかがえますので、アとイは不正解です。ウの選択肢は肯定的な返事はしていますが、前半の「久美ちゃんもそう言ってたけど」の部分が、本文からは読み取れないので誤りです。したがって正解はエです。

問三は、4 頁下段 58 行目「クラスのすみっこに溶け込んでいった。」を説明する問題です。「クラスのすみっこに溶けこむ」という表現は、「クラスの中で目立たない存在になった」と言い換えることができます。これにその原因、つまり、瀬里奈が律たちのグループから離れたことを指摘すれば、より良い解答になります。解答例としては、「目立つ瀬里奈がグループから離れたことで、もともとから大人しい律たちがクラスの中で目立たない存在になったということ。」などになります。文末を「～こと。」にすることに注意してください。

問四は、「内」という字を使った慣用句の問題です。正解は、一がア、二がオ、三がエ、四がウ、五がイです。

問五は、5 頁下段 95 行目「麗ちゃんにそう言われることが意外で」の理由を問う問題です。5 頁上段 93 行目の麗ちゃんの台詞より、麗ちゃんに友達で良かったと感謝されたことに対して意外に思った理由を答えます。律が麗ちゃんにどのように接していたかを考えると、5 頁上段 79 行目に「麗ちゃんはどうもすぐとすぐにそうして機嫌を損ねてしまうので、私はなるべく麗ちゃんを刺激しないような言葉を選ばなくてはならなかった。」とあるように、気を遣って接していたことがわかります。この部分を用いて解答を作成します。解答例としては「律は、機嫌を損ねやすい麗ちゃんを刺激しないように気をつけていただけだったから。」などになります。理由を答える際の文末表現を用いることも忘れないでください。

問六は、声を我慢して泣くということの意味する「目頭を押さえる」という慣用表現の知識を問いました。正解は「目」です。

問七は、5 頁下段 115 行目「ワークブックでとてもいい点数をとっていた」を説明する問題です。「ワークブック」という語は 5 頁上段 81 行目にも出てきており、人との会話のことを表しています。人との会話において「いい点数をとる」というのは、相手に合わせた的確な返答をすることと言えますので、解答例としては「人との会話において相手が望んでいるような対応ができるようになっているということ。」などとなります。

問八は、本文の内容に合致しているものを選ぶ問題です。正解はイです。他の選択肢を見ますと、アは「瀬里奈の読書をめぐる会話が原因で話をしなくなり」というのは言い切れませんし、「それを見かねた早野が瀬里奈に話しかけるようになって」に該当する記述も本文にはありません。ウは後半の「かえって瀬里奈は麗たちに誤解され」という記述が本文にはありません。エは後半の「瀬里奈の容姿にあこがれる早野はそういう交友は瀬里奈に似合わないと思い、」の記述が本文にはないため、誤りです。